

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530889

研究課題名(和文) 現実生活体験が青年期の精神的健康および社会適応に及ぼす影響 解離の観点から

研究課題名(英文) Effect of real life experience on adolescent mental health and social adjustment-From the perspective of dissociation

研究代表者

青木 佐奈枝 (AOKI, Sanae)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号：80350354

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年、社会的にも問題となっている現実生活体験の減少が青年期のパーソナリティ形成や社会適応に及ぼす影響に焦点を当てた。特に児童期までの現実生活体験 すなわち、実際に体を使い実物に触れる体験、直接的な対人交流体験や遊び体験 を把握する尺度を作成し、青年期を対象にその実態調査を行った。さらに、それら「現実生活体験」「遊び体験」がその後の「現実感の希薄さ・解離傾向」「共感性」「コミュニケーション能力」にどのような影響を与えているかについて青年期を対象に検討した。その結果、現実生活体験・遊び体験が部分的に共感性やコミュニケーション能力、現実感に影響を与えていることが示された。

研究成果の概要(英文)：This study is one thing in a series intended to improve youth mental health research. In the present study, considering the later mental health and social adaptation to impacts of real life experiences of children. First of all, real life experience of school-age children--i.e., actually use the body and touch the real experience, direct interpersonal exchange experiences and real daily life and play experience--scale to figure out and make sure it went and investigation. In addition to these real life experiences, play experiences, giving reality then, dissociative tendencies 'empathy' 'communication skills' to influence youth to investigate. As a result, may have affected play experience and real life experiences of empathy and communication skills, augmented indicated.

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：臨床心理学

キーワード：現実生活体験 遊び体験 解離 現実感

1. 研究開始当初の背景

インターネットや携帯電話など通信手段の劇的な変化により、現代人を取り巻くコミュニケーション事情はこの10数年で大きく変化している。自分の生活空間に居ながらにして必要資源を容易かつ敏速に手に入れることが可能な生活環境、WEB上で匿名性を保ったままに不特定多数の他者と交流ができる生活環境は、現代人の生活効率を向上させ、コミュニケーションの幅をも増大させた。その一方で、実際に体を動かし、直接、人や物に触れて交流を行う「直接生活体験」「現実生活体験」「自然遊び体験」を減少させたと言われている(内閣府,2011)。また、携帯型コンピューターゲームやバーチャルリアリティ体験型ゲームの普及は集団から個別へ、屋外から屋内へ、リアルからバーチャルへとも子どもの遊び体験の質を大きく変え、他者と直接触れ合う体験機会、全身を使って現実世界と触れ合う体験機会の減少をもたらした。これらの「現実生活体験」「自然遊び体験」の減少や「間接体験(体験の間接化)」「仮想体験」の増加は、現代青年の精神的健康や社会適応に少なからず影響を与えていることが多くの研究から示唆されている(横山,2010;内閣府,2011)。また、現実感の希薄さにも影響を与えているという知見もある。若年層の現実生活体験の実態把握及びそれが精神的影響に与える影響の詳細を把握する必要があるものと思われた。

2. 研究の目的

本研究は、現代青年の精神健康向上を考える一連の研究の中に位置し、近年、社会的にも問題となっている現実生活体験の減少が青年期の精神的健康や社会適応に及ぼす影響に焦点を当てたものである。

本研究では、特に、児童期までの現実生活体験 - 実際に体を使い実物に触れる体験、直接的な対人交流を伴うリアルな日常生活体験 - に注目し、その特徴を量的および質的に把握することを目的とした。また、「現実生活体験」が後の社会適応や精神的健康上、重要な位置にある「現実感」「共感性」「対人スキル」等にどのような影響を与えているかについて青年期を対象に調査・検討することを目的とした。

研究1では現実生活体験尺度の作成を、研究2では青年期を対象に児童期までの現実生活体験の実態調査を、そして研究3では、児童期までの現実生活体験が後の現実感、共感性、対人スキルなどにいかなる影響を与えるかについて検討することを目的とした。

3. 研究の方法

研究1 現実生活体験尺度作成

幼少期～児童期の直接交流体験・現実的な生活体験や遊び体験を調査するための尺度の作成。

調査対象者：大学生

調査期間：2011年～2012年

調査方法：質問紙調査。遊び体験を測定する尺度としては、生活体験尺度(三浦ら,2004)、大学生用生活体験尺度(久田ら,1987)、自然体験効果測定尺度(平野,2004)など先行研究を参考に質問項目を作成。また、実生活体験を測定する尺度として対人交流体験に関する尺度(水子,1998)など先行研究をもとに作成。

研究2 現実生活体験実態調査

研究1で作成した尺度を用いて、幼少期～児童期の直接交流体験・現実的な生活体験や遊び体験の実態調査を行う。

調査対象者：大学生

調査期間：2011年～2012年

調査内容：研究1で作成した「現実生活体験尺度」「遊び体験尺度」を使用。

研究3 現実生活体験と精神的健康の関連

幼少期～児童期の直接交流体験・現実的な生活体験や遊び体験の量や種類によって、その後の現実感など精神的健康が異なるかどうかの検討。

調査対象者：大学生

調査期間：2011年～2012年

調査内容：研究1で作成した「現実生活体験尺度」「遊び体験尺度」他、「現実感・解離体験尺度(Putnam,1997)」等を含む質問紙調査を実施。

研究4 現実生活体験尺度(改訂版)作成

現実生活体験尺度の改訂版の作成を行う。

調査対象者：大学生

調査期間：2012～2013年

調査方法：質問紙調査。遊び体験(大久保・青木ら,2012)に一部修正を加えたものを使用。

研究5 現実生活体験実態調査2

研究4で作成した尺度を用いて、幼少期～児童期の直接交流体験・現実的な生活体験や遊び体験の実態調査を行う。

調査対象者：大学生

調査期間：2012～2013年

調査内容：修正・改良した「現実生活体験尺度改訂版」「遊び体験尺度改訂版」を使用。

研究6 現実生活体験と精神的健康の関連2

研究4で作成した尺度を用いて、幼少期～児童期の直接交流体験・現実的な生活体験や遊び体験の量や種類によって現実感、共感性、対人スキルなどがどのように異なるかの検討。

調査対象者：大学生

調査期間：2012年～2013年

調査内容：修正・改良した「現実生活体験尺度」「遊び体験尺度」他、「現実感・解離体験尺度(Putnam,1997)」「共感性尺度(登張,2011)」「対人スキル尺度(菊池,2004)」を含む質問紙調査を実施。

4. 研究成果

研究1 現実生活体験尺度作成

「家庭生活体験」「対人接触体験」「栽培体験」「飼育体験」の4因子から成る現実生活体験尺度(29項目)が作成された。また、「伝承遊び」「屋外遊び」「制作遊び」「運動遊び」「室内遊び」の5因子から成る遊び体験尺度(30項目)が作成された。

研究2 現実生活体験実態調査

現実生活体験については女子の方が男子よりも体験率が多い、屋外体験は男子の方がより多いなどの結果が示された。

研究3 現実生活体験と精神的健康の関連

現実感の高い群の方が低い群よりも「児童期の対人接触体験」が多い傾向が示された($t=1.84, p<.1$)。

研究4 現実生活体験尺度(改訂版)作成

現実生活体験を修正・改良した結果、「家事体験」「栽培体験」「地域交流体験」「家族交流体験」「自然活動体験」の6因子(29項目)が抽出された。

遊び体験尺度を修正・改良した結果、「伝承遊び」「男児遊び」「女児遊び」「室内遊び」「集団遊び」の5因子(36項目)が抽出された。

研究5 現実生活体験実態調査2

研究4の尺度を用いて検討した結果、現実生活体験総得点は男性よりも女性の方が有意に高かった($t=-4.63, p<.001$)。また、塾・習い事の時間数別に3群で比較したところ、「地域交流体験」因子において、塾・習い事の時間が少ない群が有意に高い値を示した($F(2,332)=6.707, p=.001$)。さらに、祖父母が同居しているか否かで比較したところ、「栽培体験」因子・「地域交流体験」因子・「飼育体験」因子において、祖父母同居経験がある群が有意に高い値を示した($F(2,332)=8.045, p<.001, F(2,332)=3.802, p<.05, F(2,332)=6.394, p<.05$)。

また、遊び体験については、総得点($t=5.55, p<.01$)、「伝承遊び」($t=6.38, p<.01$)、「男児遊び」($t=8.79, p<.01$)、「女児遊び」($t=17.33, p<.01$)、「室内遊び」($t=5.47, p<.01$)で有意差が見られた。男児遊び以外はすべて女性の方が高いという結果が示された。

研究6 現実生活体験と精神的健康の関連2

解離体験尺度総得点で Carlson(1986)のカットオフポイント30%以上の群を「現実感希薄群(解離高群)」とし、平均値群(20%以下~13%)を「現実感平均群(解離平均群)」として、児童期の現実生活体験尺度総得点および下位項目得点を比較したところ、すべてにおいて現実感希薄群が低い得点を示し、現実生活体験尺度総得点に有意傾向が認められた($t=1.67, p<.10$)。また、下位尺度うち、第4因子「地域交流体験」得点($t=1.96, p<.10$)と第6因子「自然活動体験」得点($t=1.86, p<.10$)でも有意傾向が認められた。すなわち、現実感の希薄な群は平均群よりも児童期の

現実生活体験が少ない傾向にあり、なかでも家族との交流や自然活動体験も少ない傾向にあった。

一方、インターネットやテレビゲーム等を含むゲーム体験では、ゲーム体験総得点($t=2.80, p<.05$)や下位項目で有意差が認められ、いずれも現実希薄群が平均群と比較して高い得点を示した。さらに、バーチャルリアリティ性の高いゲーム2項目合計においても、同じく現実希薄群が有意に高い得点を示した($t=2.42, p<.05$)。以上より、現実感の希薄な群に、児童期の現実生活体験が少なく、ゲーム体験が多いことから示された。児童期の生活体験がその後の現実感はじめ精神健康に様々な影響を与える可能性が示唆された。

また、幼少期の「現実生活体験」、「遊び体験」および「ゲーム体験」が「社会的スキル」、「共感能力」、「現実感」に及ぼす影響について検討を行うために、強制投入法による重回帰分析を行った。その結果、まず社会スキルの「感情処理スキル」や「マネジメントスキル」に対して、遊び体験の「集団遊び」($\beta=.15, p<.05$; $\beta=.28, p<.001$)が正の影響を示し、ゲーム体験の「集団型ゲーム」($\beta=-.26, p<.01$)が負の影響を示していた。共感性では主に「他者指向的反応」や「想像性」などに対する影響がみられた。前者では、現実生活体験の「家族交流」($\beta=.18, p<.05$)や遊び体験の「室内遊び」($\beta=.21, p<.01$)、「集団遊び」($\beta=.17, p<.05$)が弱い正の影響を示していた。後者では、遊び体験の「女児遊び」($\beta=.21, p<.05$)や「室内遊び」($\beta=.19, p<.05$)が弱い正の影響を示した。また、現実感の希薄さへの影響としては、現実生活体験の「家族交流体験」($\beta=-.24, p<.01$)やゲーム体験の「投影型ゲーム」($\beta=-.22, p<.05$)が弱い負の影響を示していた。

以上より、現代青年の社会的スキルや共感性は、集団における相互交流のなかで育まれる可能性が示唆され、集団でもゲームといった型にはまった臨機応変のききにくい状況の中での交流では育まれにくい可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 8 件)

高木慧・谷秀次郎・政所友里・板垣佳苗・青木佐奈枝、現実生活体験尺度(改訂版)作成の試み - 児童期の生活体験がその後の精神的健康に及ぼす影響 1 -、2014.8.23~26、第33回日本心理臨床学会大会(パシフィコ横浜(神奈川県))
政所友里・谷秀次郎・高木慧・大久保智紗・青木佐奈枝、遊び体験尺度(改訂版)作成の試み - 児童期の生活体験がその後

の精神的健康に及ぼす影響 2 - 、
2014.8.23~26、第33回日本心理臨床学会大会（パシフィコ横浜(神奈川県)）
青木佐奈枝・谷秀次郎・政所友里、児童期の生活体験とその後の現実感の関連 - 児童期の生活体験がその後の精神的健康に及ぼす影響 3 - 2014.8.23~26、第33回日本心理臨床学会大会（パシフィコ横浜(神奈川県)）
谷秀次郎・政所友里・青木佐奈枝、児童期の生活体験がその後の精神的健康及び適応に与える影響 - 児童期の生活体験がその後の精神的健康に及ぼす影響 4 - 、
2014.8.23~26、第33回日本心理臨床学会大会（パシフィコ横浜(神奈川県)）
板垣佳苗・大久保智紗・今野仁博・青木佐奈枝、現実生活体験・遊び体験が青年期の現実感に及ぼす影響 1 現実生活体験尺度の作成の試み 、2012.9.14、第31回日本心理臨床学会大会（愛知学院大学(愛知県)）
大久保智紗・青木佐奈枝・今野仁博・板垣佳苗、遊び体験尺度の作成 現実生活体験・遊び体験と青年期の現実感の関連 2 、2012.9.14、第31回日本心理臨床学会大会発表（愛知学院大学(愛知県)）
青木佐奈枝・今野仁博・板垣佳苗・大久保智紗、児童期の現実生活体験・遊び体験と青年期の現実感の関連 現実生活体験・遊び体験と青年期の現実感の関連 3 、2012.9.14、第31回日本心理臨床学会大会（愛知学院大学(愛知県)）
今野仁博・青木佐奈枝・板垣佳苗・大久保智紗、青年期の現実感の個人差を予測する要因 現実生活体験・遊び体験と青年期の現実感の関連 4、2012.9.14、第31回日本心理臨床学会大会（愛知学院大学(愛知県)）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木 佐奈枝 (AOKI, Sanae)
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：80350354

(2) 研究分担者

なし